

審査の結果の要旨

論文題目：

Postoperative kidney function in Japanese living kidney donors

日本人生体腎移植ドナーの腎提供後腎機能

申請者氏名：木戸 亮

本研究は、生体腎移植ドナーの安全性の視点に基づいた適切なドナー選択基準、腎提供による医学的リスクの有無やその危険予測因子、腎提供後のドナー管理における臨床上的要点は何か、といった、依然として検討が乏しい問題について明らかにするため、診療録調査に基づいて行われた臨床研究である。3つの研究により、それぞれ以下のような結果が得られている。

1. 日本人ドナーの術後腎機能を中心に実態調査が行われ、多くの日本人ドナーは腎提供後に **CKD stage3** に進展するが、その後の腎機能の進展・増悪は認めなかった。**CKD** は一般に進行性腎機能障害を来すと考えられるが、元来わずかな進展危険因子しか保有しない生体腎ドナーにおいては、例え腎提供後に著しい低腎機能を呈しても、それだけで **CKD** の疾患概念を当てはめることは不相当であるのかもしれないことが示唆された。
2. 末期腎不全に進展した生体腎ドナーについて、その腎機能推移と進展危険因子が検討された。長期安定していたドナーと比較して調査したところ、腎提供直後から長期（10年以上）にわたって安定した腎機能を維持していたが、腎提供後に獲得した合併症、特に **CKD** 進展危険因子（持続尿蛋白・高血圧・急性心血管イベント・重症感染症・入院イベント）の獲得・発症を契機として、急激に腎機能低下が開始していた。以上から、腎提供後の **CKD** 進展危険因子の獲得・発症に特に留意し、その予防や発症時の早期対応を行うために、例え腎機能が安定していたとしても、ドナーは10年以上に渡る定期的な長期術後フォローアップが必要であることが示された。

3. 腎提供前後の血尿所見と術後腎機能の関連性が調査された。その結果、腎提供前および後に持続糸球体性血尿を呈する生体ドナーは、有意に腎提供後の持続尿蛋白の出現や腎機能低下のリスクが高かった。以上から、血尿を呈するドナー候補者の適格性評価には、例え単独血尿であっても、注意が必要であり、持続糸球体性血尿を呈するドナー候補者は除外されるべきであることが示唆された。

上記の論文に対する審査の結果、その内容はいずれも実際の臨床医学において応用可能な新知見を多く含むものと評された。本研究の結果は、今後の腎移植医療の安全性向上に大きく寄与するものと考えられ、審査会の終了時において、上記題目の論文は博士学位論文として適当であり、学位授与に値するものと判断された。